



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ART
RESEARCH LAB

— *REPORT 2010* —

TARLトラの巻

「一子相伝、秘伝の書」とは対極の概念で用意されたのが本リーフレットである。昨今の流行り言葉「オープンソース、フリー、シェア」に端的に示されているような価値観——オープンな知の共有と創発的なバージョンアップ、それらが繋がることで生じるネットワーク化——を推進することを目的としたものだ。

アートプロジェクトをマネジメントするために必要とされる知をデバイス化することを目的に開講された「Tokyo Art Research Lab」(以下、TARL。)の初年度の活動とその成果を報告する目録である。

リサーチ型の人材育成プログラムとしてTARLがどのような目的で、どのような仕立てで開催されたか、さらにどのような活動がなされたかの詳細は、TARLの統括を担当した石田喜美プログラムオフィサーが記した「FIELD REPORT」に詳しい。

実施された連続・公開あわせた10講座は、アートプロジェクトを創出し、維持し、展開するための活動をつくる」「支える」「評価する」「伝える」「記録する」の5つのカテゴリーにフレーム化して開講された。開講時に想定された「社会的創造者としてのリサーチャー」(港千尋)たちは、この5つの活動領域を個別に精通する必要性以上に、アートプロジェクトを展開する者として、5つ全体を知り、有機的に繋ぎ合わせて使いこなせる技量と知識と経験が必要とされる。本リーフレットの装丁が蛇腹なのは、そのことを一瞥できるようにとの思いからである。

濃密に展開された各講座の成果はPDF化され、編纂された「知」としてネット上にアップされた。アートプロジェクトに必要な知をアートプロジェクトに関わるみんなで更新可能にするオープンソース化という環境の整備はTARLの目指す最終ゴールの一つだ。

TARLは1年目を終え、まだまだ必要とする講座も見えてきた。アートプロジェクトチームがプロジェクトを展開する上で必要となるスキルや理解——たとえば、広報活動やそもそも活動事態を捉える価値観、そして組織論など——は来期以降の講座において押さえておく必要のある項目だと思う。

TARLが、アートプロジェクトのリサーチとアートプロジェクトのための人材育成の二つを目的としている以上、「リサーチ」と「座学」に続く「実践」——現場におけるインターンとしての経験——も求められる。大学と連携して実施した3事業は、まさにその先行事例になるのだが、来期以降は、東京アートポイント計画として展開しているプロジェクトに参加するかたちで、実践の場からの学びと座学とをつないでいきたいと考えている。ともあれ、TARL1年目の成果をご覧いただき、各自の現場において活用されるとともに、活用者としての建設的なご意見をいただけたらと思う。



本ゼミは、単なるイベントとは異なる「アートプロジェクト」をはじめのために必要な基本事項を、下記の通り5つに区分し、多彩なゲストによるレクチャー中心の授業を行ってきた。また最終的に、ゼミ生一人一人が思い描くアートプロジェクトがより具体的なイメージを形成できるよう、カリキュラム設計がなされていた。

- ・アートの歴史・アートの概念を学ぶ… 現代美術における重要な概念、作品紹介を中心に講義を行った。
- ・アーティストを知る… 現在進行形で活躍するアーティスト3名を招き、作品や活動について話を伺った。
- ・文章力やデザイン力を身につける… 第一線で活動するライター・美術評論家らの指導のもと、展覧会等の紹介文、批評文の作成を行った。
- ・アートプロジェクトを体験する… 日本全国のアートプロジェクトへ赴き、その特徴や問題点をまとめ、レポート発表を行った。またアートプロジェクトのディレクター3名によるレクチャーも行われた。
- ・隣人と議論する… 授業は全てゼミ形式となり自由な雰囲気の中、ゼミ生同士がディスカッションを重ねてきた。

以上のカリキュラムを経て、ゼミ生はそれぞれが思い描くアートプロジェクトを実践するスタートラインに立つことができたと考えられる。しかし本ゼミはあくまでシュミレーションの枠を超えることはなく、今後、ゼミ生がレクチャーを通じて獲得した考え方やスキルをどう実践に生かしていくのが課題となるとともに大変楽しみなどころでもある。

(リサーチ・アシスタント 牛久珠理)

オンラインセミナー
◆アートプロジェクトの0123 <連続ゼミ>

◆開催日：

<レクチャー> 2010年7月-2011年3月 木曜日 19:00-21:00 (全20回)

7/1, 7/15, 7/29, 8/5, 8/26, 9/2, 9/16, 9/30, 10/14, 10/28, 11/4, 11/18, 12/2, 12/16, 1/13, 1/27, 2/3, 2/17, 3/3, 3/22

◆コーディネーター：小川希 (「TERATOTERA」チーフディレクター・Art Center Ongoing 代表)

◆リサーチ・アシスタント：牛久珠理 (「TERATOTERA」TERAKKO)

◆ゼミ生：14人

◆ゲスト：岩井優 (アーティスト)、志村信裕 (アーティスト)、浅井裕介 (アーティスト)、

白坂ゆり (ライター)、福住廉 (美術評論家)、長内綾子 (コーディネーター)、遠藤一郎 (未来芸術家)、

芹沢高志 (P3 art and environment エグゼクティブ・ディレクター/「混浴温泉世界」総合ディレクター)、

山野真悟 (「黄金町バザール」ディレクター)

▼成果物

ドキュメント『アートプロジェクトの0123』(PDF)

<http://www.bh-project.jp/artpoint/app/class01-01.html>

「アートプロジェクト運営ガイドラインβ版」をもとに、アートプロジェクトの課題と可能性をゼミ生と共有することができている。10月から12月にかけて実施したゲストレクチャーでは、広報、プロジェクト実施、情報デザインに関する講義や事例紹介によって、アートプロジェクトの運営を多様な視点から検証し、具体的な事例を元にプロジェクト運営のイメージを膨らませることができた。さらに1月17日に実施された座談会では、アートプロジェクト実施実績のあるゲストによってガイドラインの内容や用途を検証し、その方向性を明らかにした。ゼミの課題はガイドラインをプロジェクト運営経験者にとって役立つものだけでなく、プロジェクト運営初心者が手にとって活用できるものとして汎用性の高いガイドラインを作り出すことである。 (リサーチ・アシスタント 白井隆志)

◆プロジェクト運営ぐるっと360度 <連続ゼミ>

◆開催日：

<レクチャー> 2010年7月-2011年3月 水曜日 19:00-21:00 (全8回)

7/7、8/25、9/15、10/6、11/10、12/8、1/17、2/9

<研究会> 10/20、12/1 (全2回)

◆コーディネーター：帆足亜紀 (アートコーディネーター)

◆リサーチ・アシスタント：

白井隆志 (アーティスト・イン・児童館実行委員会 代表/慶應義塾大学総合政策学部 学部生)

◆ゼミ生：14人

◆ゲスト：

中島恵理花 (株式会社エスエス製薬 広報担当)

吉田有里 (あいちトリエンナーレ アシスタントキュレーター)

西村佳哲 (Living World 代表)

日沼禎子 (国際芸術センター青森 学芸員)

宮本初音 (ART BASE 88 代表)

小川希 (Art Center Ongoing 代表)

▼成果物

ガイドライン『アートプロジェクト運営ガイドライン』(PDF)

<http://www.bh-project.jp/artpoint/app/class02-01.html>

【「見巧者」になるために】批評家・レビュー養成講座では、毎回批評やレビューを書く課題を設け、コーディネーターによるコメントや添削を加えて返却するなかで、ゼミ生が文章を書いていく実践を重ねることが講座の一つの軸となった。加えて、美術家・高嶺格をゲストに迎えてのインタビューや、建築展やパフォーマンスを見た上でディスカッションを行うなど、単なる座学におさまらない多角的な内容を目指した。その成果として、ゼミ生が課題として提出したレビューやプレビューのいくつかが、ウェブサイト「REAL TOKYO」に掲載されている。さらに、参照されるべき近年の日本の批評を10-20本ほど選び英訳を行う、批評アンソロジーの編纂にも取り組んでおり、ゼミ生に限らず、広く一般に公開される予定となっている。

今後の課題としては、リサーチ・アシスタントがサブゼミなどを積極的に設けてゼミ生同士の交流を図るなど、ゼミのさらなる活性化を見越した場づくりの必要性が考えられる。

(リサーチ・アシスタント 大山エンリコイサム)

◆【「見巧者」になるために】批評家・レビュー養成講座 <連続ゼミ>

◆開催日：

<レクチャー> 2010年6月-2011年2月 水曜日 13:00-15:30 (全8回)
6/30、7/21、9/22、10/13、11/24、12/22、1/19、2/23

◆コーディネーター：

小崎哲哉 (『REAL TOKYO』『REAL KYOTO』発行人兼編集長・『ART iT』ファウンダー)

◆リサーチ・アシスタント：

池田剛介 (美術家)

大山エンリコイサム (美術家)

◆ゼミ生：12人

◆ゲスト：高嶺格 (アーティスト)

▼成果物

レビュー「特別編『HARAJUKU PERFORMANCE + 2010』クロスレビュー」
(『REAL TOKYO』掲載)

http://www.realtokyo.co.jp/docs/ja/column/review/bn/review_004/

全8回の評価ゼミでは、財団、企業、行政、アートプロジェクトなど複数の立場のゲストによる「評価」の実践や捉え方が示された。多様な現場の評価の実態を知ることで、それらに共通した評価の議論のベースを理解し、同時に各現場での実践は現場に合わせ、試行錯誤を重ねた創造的な行為であることを実感できた。第7回にはロールプレイング・ディベート、最終回の個人発表とディスカッションでは、ゼミ生が主役となり、発言を行なった。ゼミと並行して開催された研究会では、事例研究から始まり、これまでの評価のあり方そのものを問い直し、新たな評価のあり方(考え方)が模索された。ゼミ生が「自ら実践してみたいと思う評価」のあり方の確立を目指した本ゼミにとって、理念的なベースをつくりながら、(研究会も含め)ゼミ生が自身の課題として主体的に議論していく機会ができたことは大きな成果となった。今後は、より実践の現場へフィードバックしていく機会や方法をいかにつくっていくかが課題として残った。

(リサーチ・アシスタント 佐藤李青)

◆アートプロジェクトを評価するために～評価のくなぜ?～を徹底解明 <連続ゼミ>

◆開催日:

<レクチャー> 2010年7月-2011年2月 火曜日 19:00-21:00 (全8回)
7/13, 8/3, 9/14, 10/12, 11/16, 12/14, 1/11, 2/15

<研究会> 2010年9月-2011年2月 月曜日・火曜日・水曜日 19:00-21:00 (全8回)
9/1, 10/4, 11/1, 11/29, 12/22, 1/19, 2/16, 3/1

◆コーディネーター: 若林朋子 (公益社団法人企業メセナ協議会 シニア・プログラム・オフィサー)

◆リサーチ・アシスタント: 佐藤李青 (東京大学大学院人文社会系研究科 院生)

◆ゼミ生: 16人

◆ゲスト:

片山正夫 ((財)セゾン文化財団 常務理事)

加藤種男 ((財)アサヒビール芸術文化財団 事務局長)

柴沼雄一朗 (総務省行政評価局政策評価官室 総括評価監視調査官)

芹沢高志 (P3 art and environment エグゼクティブ・ディレクター/AAF 事務局長)

雨森信 (インディペンデントキュレーター/remo[NPO 法人記録と表現とメディアのための組織]理事)

太下義之 (三菱UFJリサーチ&コンサルティング 芸術・文化政策センター主席研究員/センター長)

▼成果物

①ドキュメント『評価ゼミ レクチャーノート』(PDF)

<http://www.bh-project.jp/artpoint/app/class04-01.html>

②「アートプロジェクトを評価するために」ブログ

<http://evasemi.blogspot.com/>

③「アートプロジェクトを評価するために」Twitter

<http://twitter.com/evasemi>

P+ARCHIVE ゼミ「アート活動としてのアーカイブ」では、来年度のアート・アーカイブ開設を目指し、ゼミ生たちとともにアーカイブを基礎から学ぶカリキュラムを組んだ。多彩なゲストによる全5回のレクチャーを開催し（USTREAMで配信）、またレクチャーを受けたゼミ生たちが自由に議論をする研究会を全10回行った。ゼミの後半からは、アートプロジェクトのドキュメンテーションを受講生たちが実際に行う課題「リアルプロジェクト・アーカイブ」によって、都内近郊の5つのアートプロジェクトと連携し、アート・アーカイブ構築のケーススタディを行うことができた。彼らの活動は、ゼミの最終的な作成課題である「アート・アーカイブ ガイドブック」に事例報告として収録された。

来年度への課題としては、ただレクチャーを受けるだけでなく、資料を実際に手にとって学ぶカリキュラムを組むことである。ゼミの内容にさらに深みが出るだろう。

(リサーチ・アシスタント 清水康宏)

◆アート活動としてのアーカイブ <連続ゼミ>

◆開催日：

<レクチャー> 2010年7月-11月 木曜日 19:00-21:00 (全5回)

※第1回のみ土曜日 7/24、8/19、9/9、10/7、11/11

<研究会> 2010年7月-2011年3月 火曜日 19:00-21:00 (全10回)

※第1回・第2回のみ木曜日・水曜日 7/8、8/4、8/31、9/21、10/19、11/30、12/7、1/18、2/22、3/8

◆コーディネーター：NPO法人アート&ソサイエティ研究センター

◆リサーチ・アシスタント：清水康宏（東京大学大学院人文社会系研究科 院生）

◆ゼミ生：21人

◆ゲスト：

川俣正（アーティスト）、上崎千（慶應義塾大学大学院文学研究科 特別研究助教）、

畠中実（NTT インター・コミュニケーション・センター[ICC] 主任学芸員）、

嘉藤笑子（アート・アウトノミー・ネットワーク[AAN] ディレクター）、

ドミニク・チェン（NPO法人クリエイティブ・コモンズ・ジャパン 理事）、熊倉敬聡（慶應義塾大学理工学部 教授）、

芹沢高志（P3 art and environment エグゼクティブ・ディレクター/AAF 事務局長）、

山口祥平（一般社団法人CIAN プログラム・マネージャー）

▼成果物

①ガイドブック『P+ARCHIVE アート・アーカイブ ガイドブック』（PDF）

②「P+ARCHIVE」ウェブサイト/デジタル・アーカイブ

<http://www.art-society/parchive/>

③ドキュメント『地域・社会に関わるアートアーカイブ・プロジェクト
—P+ARCHIVE 一年の活動記録』

④映像アーカイブ「アート活動としてのアーカイブ」（Ustream）

<http://www.ustream.tv/channel/p-archive> ゼミ

入門編として幅広い参加者を対象とするイベント・レクチャー型のプログラムを初めて本格的に開催したことで、特に美術作家のようにお金や法に苦手意識を持っている人にとっては学ぶ機会の提供ができた。しかし既に実務に関わっている参加者には物足りないものとなってしまった点、また、イベントに偏重し、より幅広い影響を与えることができるオンライン・サポートの進捗が滞った点が課題である。今後はプロフェSSIONALとその志望者を対象としたリーダーシッププログラムを軸とし、入門編はオンライン・サポートでの情報発信に集約するといった整理が必要であると考えている。

(Arts and Law 作田知樹)

◆アートのお金と法律入門 <集中セミナー>

◆開催日：

<集中セミナー「アートのお金と法律入門」>

2010年9月、2011年2-3月

9/18-19 (集中合宿セミナー「アートのお金と法律入門」)

2/12 (集中セミナー「造形・美術作家のためのTAX講座」)

2/19 (「アート活動を行う人のための確定申告無料相談会」)

<専門家相談会「アートの法律クリニック」>

11/3、12/12、1/16、2/7、2/13 14:00-16:00

<ピアール・メンタリング>

7/8、9/30、11/23

◆コーディネーター：Arts & Law (NPO法人Community Design Council)

◆ゼミ生：

集中セミナー「アートのお金と法律入門」：47人

専門家相談会「アートの法律クリニック」：5人

ピアール・メンタリング：30人

◆ゲスト等：

鄭一志 (弁護士/Arts and Law)、水野拓 (弁護士/Arts and Law)、

永井幸輔 (弁護士/Arts and Law)、藤森純 (弁護士/Arts and Law)、

山内真理 (公認会計士/Arts and Law)、中村ケンゴ (美術作家)、

佐藤好彦 (アーティスト)、竹崎和征 (アーティスト)、

上田智雄 (税理士)、花房太一 (アートコメンテーター)

▼成果物

情報サイト「artscoop」

<http://artscoop.jp/>

本ゼミでは90年代の日本におけるアートプロジェクトを検証し、それらの活動を考察・分析することをゼミの目的にすえ、さまざまな現場に携わっている方に活動内容を伺うことで個々の事例の特徴、過去20年間のアートプロジェクトの展開を明らかにした。アーティスト型、キュレーター型、市民運営型、行政や美術館、大学など、それぞれに特徴的な傾向がある代表的な大型プロジェクトから、昨今登場した新たな形態の活動まで、多彩な特徴を一つにまとめて紹介するとともに、これまでのアートプロジェクトの活動を広い視野で考察し、どのような変化を最終的に地域社会にもたらすことができたのかを比較する材料を提供した。講座では、公開形式の「活動紹介・座談会」と、ゼミ形式の「研究会」でディスカッションを重ね、記録・編集したテキストを公開。アートプロジェクトを研究対象としている学生・研究者などに資料として活用してほしいと考えている。ディスカッションでは成功談だけでなく、失敗や挫折、課題などを浮き彫りにした。このテキストを活用する人々が、これらのエピソードからプロジェクト実施のヒントを抽出し、活動を充実させることができればこの講座の成果の一つになると考える。

(リサーチ・アシスタント 永尾真由)

◆日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990-2010 <公開講座>

◆開催日：

<活動紹介・座談会> 2010年7月-2011年1月 金曜日 14:00-16:00 (全8回)
7/2, 8/6, 9/3, 10/1, 11/5, 12/3, 1/7, 1/21

<研究会> 同 16:00-19:00 (全8回)

◆コーディネーター：熊倉純子 (東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科 教授)

◆リサーチ・アシスタント：

菊地拓児 (クリエイター・コールマイン研究室)、渡辺文菜 (東京大学大学院学際情報学府 院生)

永尾真由 (一橋大学大学院言語社会研究科 院生)

◆ゼミ生：57人 (受講登録者数)

◆ゲスト：

加治屋健司 (広島市立大学)、長田謙一 (首都大学東京)、小川希 (Art Center Ongoing/TERATOTERA)、

野田恒雄 (紺屋 2023)、竹久侑 (水戸芸術館現代美術センター)、鷺田めるる (金沢 21世紀美術館)、

山出淳也 (BEPPU PROJECT)、吉田有里 (あいちトリエンナーレ 2010)、新井慶太 (北本ビタミン)、

石山拓真 (ゼロダテアートプロジェクト)、高野織衣 (ヒミンク)、羽原康恵 (取手アートプロジェクト)、

雨森信 (プレーカープロジェクト)、河本一満 (寿オルタナティブ・ネットワーク)、

加藤種男 (アサヒビール芸術文化財団)、北村智子 (千島土地株式会社)、藤浩志 (アーティスト)、

川俣正 (アーティスト)

▼成果物

ドキュメント『日本型アートプロジェクトの歴史と現在』(PDF)

<http://www.bh-project.jp/artpoint/app/open01-01.html>

美術家・川俣正監修による、東京の現状と可能性を考えるトークシリーズ。昨年度は、各研究分野の第一線で活躍している6人の専門家(今福龍太、桂英史、隈研吾、高山明、羽藤英二、吉見俊哉)を迎えて即興的な対談をおこなった。続編となる今年度は、海外で活躍する専門家を招へいし、「外」から見た「東京」の姿について考える機会を提供することで、「東京」という場に潜む多様なテーマを新たな視点から見出し、「東京」を語るための新たな言説を編み出すことができた。

(東京アートポイント計画 プログラムオフィサー 坂本有理)

- ◆川俣正 東京トークシリーズ「東京を考える、語るⅡ」〈公開講座〉
- ◆開催日：〈レクチャー・対談〉 2011年2月 金曜日-日曜日 18:00-21:00 (全3回)
※第2回のみ 19:00-21:00 2/13, 2/18, 2/19, 3/11, 3/12, 3/13
- ◆ゲスト：フェルディナンド・ウルリヒ (キュレーター)、イーデン・コーキル (ライター)、ジル・クデール (映像作家)
- ◆監修・ホスト：川俣正 (美術家)
- ◆来場者数：のべ 69人
- ▼成果物
ドキュメント『東京を考える、語るⅡ』(PDF)

<http://www.bh-project.jp/artpoint/app/open04-01.html>

ゲストがこれまでに取り組んできた活動と、海外におけるアートプロジェクトの現場体験を聞き出すことで、東京および日本国内でアートプロジェクトに取り組む際にも参考になる、広い視野を獲得することができた。また公開収録だけではなく、ポッドキャストという形で収録内容を配信することで、多くの人にその内容を共有することができた。

(東京アートポイント計画 プログラムオフィサー 橋本誠)

- ◆世界の現場から～Talk & Cast～ 〈公開講座〉
- ◆開催日〈公開収録〉 5/6, 7/5, 8/24, 10/18, 11/22, 12/5 19:00-21:00 (全6回)
- ◆ゲスト：浅井裕介 (アーティスト)、西尾美也 (アーティスト)、南川憲司 (アーティストユニット「wah」)、西野達 (アーティスト)、住友文彦 (キュレーター)、大巻伸嗣 (アーティスト)
- ◆ホスト：森司 (「東京アートポイント計画」ディレクター)
- ◆来場者数：のべ 91人
- ▼成果物
ポッドキャスト

<http://www.bh-project.jp/artpoint/podcast/>

本ゼミは、ゲストのレクチャーと、リサーチ・アシスタントやゼミ生によるディスカッションが行われるセミナーの二部構成だった。座学で終わることなく、回によってはレクチャーのテーマに沿った課題を提示し、受講生の実践とフィードバックがおこなわれた。セミナーを重ねるごとにゼミ生同士の問題意識や関心がゆるやかに共有されるゼミとなった。また、ゼミ生によるプレゼンテーションが最終回に設定されており、各自のアイデアや構想を具現化する上で異なる業種・バックグラウンド同士で心強い人脈が築くことができた。最終的に全ゼミ生のうち半数近くがプレゼンテーションを行い、ゼミ修了後もゼミ生同士で交流している様子が窺えるなど、長い視程で関係性が深められるのではと思っている。今後の課題として、プレゼンテーションで提案されたアイデアをどのように実現し、その成果をどの様に発信していくのか、またそのためにどのような支援を提供することができるのか、といった点を次年度以降詰めていきたい。

(リサーチ・アシスタント 吉田真理子)

◆Tokyo Art School 2010 <公開講座>

◆開催日：

<レクチャー> 2010年9月-11月 集中 13:00-15:30 (全6回)

※第3回・第5回のみ 19:00-21:30 9/18, 9/26, 10/4, 10/16, 10/2, 11/7

<セミナー> 2010年9月-11月集中 16:00-17:30 (全6回)

※第3回・第5回のみ 19:00-21:30 9/18, 9/26, 10/5, 10/16, 10/27, 11/7

<プレゼンテーション> 11/20

◆コーディネーター：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]

◆リサーチ・アシスタント：

阿部純 (東京大学大学院学際情報学府 院生)

毛原大樹 (東京芸術大学大学院美術研究科 院生)

光岡寿郎 (早稲田大学演劇博物館 GCOE 研究助手)

吉田真理子 (慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員)

◆ゼミ生：27人

◆ゲスト：森弘治 (美術家)、生意気 (デザイナー)、江口宏志 (Utrecht 代表)、

ルーカス・パデキ・バルコ (ニーハイメディア・ジャパン 代表/クリエイティブ・ディレクター)、

モーリー・ロバートソン (ミュージシャン)、上野俊哉 (和光大学 教授)、中村政人 (美術家)、

伊藤ガビン (編集者)、大友良英 (ギタリスト/ターンテーブル奏者)、東谷隆司 (キュレーター)、

都築響一 (編集者)、吉見俊哉 (東京大学大学院情報学環・学際情報学府 教授)

▼成果物

ドキュメント『Tokyo Art School 2010』(PDF)

<http://www.bh-project.jp/artpoint/app/open02-01.html>

◆「大学まち」のデザインをつうじた地域力の可視化に関する研究：
「墨東大学」の実践と評価

「墨東大学」は、「大学(まち)」というメタファーで地域コミュニティにアプローチし、誰もが「教授」「講師」として自らの生活の中で得た知を他者とともに共有することのできるシステムを提供することにより、地域コミュニティ内外の多様な人々によるコミュニケーションを誘発するプロジェクト。本プロジェクトによって「墨東大学」という存在を社会的に構築するさまざまな人工物(artifact)やウェブサイト、授業システムなどが開発された。

◆主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、慶應義塾大学、東京都市大学 ◆協力：特定非営利活動法人向島学会

◆企画：bockt(加藤文俊・岡部大介・木村健世)

▼成果物

①「墨東大学」ウェブサイト

<http://bokudai.net/>

②『「大学まち」のデザインを通じた地域力の可視化に関する研究：

「墨東大学」の実践と評価」ドキュメント

◆NHK×学生 クロスメディアプロジェクト

アート、まち、ソーシャルメディアをクロスさせ、リアルなまちなかでのイベントとバーチャルなドラマ世界・ネット世界とが相互につながるような仕組みを構築することで、リアルな世界とバーチャルな世界を相互につなぐ広報プロジェクトを実施。ワンセグドラマ用コンテンツ『こいわらい』(原作・松宮宏)を事例として、PCやモバイル、ソーシャルメディア、セカイカメラ、イベントなどを複合的に用いた広報プロジェクトを展開した。

◆主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、青山学院大学

◆協力：日本放送協会(NHK)、青山・渋谷エリア町会・商店会ほか

◆企画：青山学院大学社会学連携研究センター、日本放送協会(NHK)ほか

▼成果物「こいわらいほーたる」

<http://koiwarai.jp/>

◆小金井110人のストーリー

地域型アートプロジェクトの展開における様々な課題のうち、市民とのネットワークをつくり地域との関係基盤を築くことに焦点を当て、東京都小金井市を事例として、地域における「人のネットワーク」形成の手法を実験的に明らかにしたプロジェクト。地域で魅力的な活動を行っている人たちへの公開インタビューと、そこからのキーワード抽出から、その地域における地域資源を明らかにするという手法を開発した。

◆主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京大学

◆協力：小金井アートフル・アクション! 実行委員会、東京学芸大学グラフィックデザイン研究室

▼成果物

①インタビュー・アーカイブ「小金井110人のストーリー」

http://artfullaction.net/110/archive_00.html

②ドキュメント「小金井110人のストーリー」(PDF)

③ドキュメント「ままだらま水脈」(PDF)

<http://artfullaction.net/110/blog.html>



Tokyo Artpoint Project Room 302 (Tokyo Art Research Lab 実験会場)

Tokyo Art Research Lab

Tokyo Art Research Labとは、東京アートポイント計画の一環として実施される、未検証の事例や現在進行中の事例を分析・検証するリサーチプロジェクトです。生活圏で行われるアートプロジェクトの課題や可能性を考察することで、アートプロジェクトに関わる知やスキルの確立を目指します。

東京アートポイント計画

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室 ©2010

〒130-0026 東京都墨田区両国 3-19-5 シュタム両国 5階

TEL: 03-5638-8800 FAX: 03-5638-8811 Email: info-ap@bh-project.jp

URL: <http://www.bh-project.jp>



FIELD REPORT

はじめに

「Tokyo Art Research Lab」(以下、TARL。)は、リサーチ型の人材育成プログラムである。本年度当初に作成された『TOKYO ART RESEARCH LAB』(TARLのコンセプトブック兼シラバス)では、以下のような説明がなされている。

まちなかで様々なアートプロジェクトが実施されつつある昨今、東京という場所にこのような「知」のプラットフォームを確立することは重要な活動といえるだろう。単にアートを地域に持ち込むのではなく、その場所で日常生活を営む人々とともに、その生活圏の中でプロジェクトを行っていく。そこにはありとあらゆる問題や可能性があらわれてくる。リサーチ行為によってその問題や可能性を抽出し、それらを分析することにより、アートプロジェクトを持続可能にするシステムを構築する。またその意義を言説化していくというプロセスを通して、地域と人を繋げていくアート活動を活性化させるための環境基盤を整備し、またそれを担う人材を育成していくのが「Tokyo Art Research Lab」の試みである。

(「Tokyo Art Research Lab —『アートプロジェクト』を研究するプロジェクト始動!」『TOKYO ART RESEARCH LAB』pp.3-5より)

ここで言われているような「(環境基盤を整備するための)リサーチ」と「人材育成」がどのように関わりあい、そこから何が創造されるのか。この問いに答えることが、本プログラムの大きな目的のひとつであったと言えるだろう。

ところでこの問いについて港千尋氏は、本プログラムが始まる前に、すでに「社会的創造者としてのリサーチャー」というキーワードによって、「リサーチ」と「人材育成」を一体のものとする本プログラムの意義を示している。しかしここでは、それとはまた異なる立場から、「TARL」として行われたさまざまなゼミや講座でのエピソードを踏まえて、「リサーチ」と「人材育成」とを一体としてとらえてきた、本プログラムの意義を考察してみたい。

アート活動におけるベターメント

アート活動にとってのベターメント (betterment; より良くなること) とは、いったい何か。TARL全体のプログラムを考えるにあたって、私自身が日々考えていたのはこの問いだった。それまで「東京アートポイント計画」では、なんらかの意味でアート活動をめぐるコミュニティをアプリアリ(自明的な認識・概念)なものとして捉え、そのアプリアリなコミュニティに参加し、自らの実践を創り出

すことのできる人材を育成するという方針で人材育成プログラムを実施してきた。しかし、TARLではアプリアリなものとしてのコミュニティを前提としていない。むしろ、コミュニティとは学習しつづけるもの、更新しつづけるものであるという前提が、TARLの出発点である。

このように、学習・更新しつづけるコミュニティとして、アート活動をめぐる諸々の組織・コミュニティを捉え、その上で、人材育成プログラムを考えると、「アート活動におけるベターメントとはいったい何か」という問いが非常に重要なものとして浮かびあがってくる。組織・コミュニティがアプリアリなものであれば、そこで必要とされる知識やスキルを明らかにし、その知識やスキルを獲得することのできるカリキュラムを組みれば良い。しかしそうではなく、組織・コミュニティそのものの学習に寄与することのできる人材とは何か、と考えると問題はそこまでシンプルなものではなくなってくる。そして、むしろ、アート活動のベターメントのために必要なのは、はたして人材育成のみなのか、という新たな問いが浮上する。

野火的な活動 (wildfire activities) としてのアート活動

これらの問いを考える際に、まず、現代日本におけるアート活動とは、どのような種類の活動なのかを考えてみたい。この問いには様々な答えがありうるが、重要なキーワードとなりうるもののひとつに、「野火的な活動」(wildfire activities)という言葉がある。「野火的な活動」とは、野火のように、あるところで消えてなくなったかと思えば、まったく別場所で現れ、また同じ場所で時間をおいて現れたりするかたちで、同時多発的にさまざまな場所で創造され、拡大し、相互につながっていく活動を示している。(ユーリア・エンゲストローム「拡張的学習の水平次元」山住勝広、ユーリア・エンゲストローム『ネットワーキング—結び合う人間活動の創造へ』より)

このようなアート活動の例としては、「墨東まち見世」参加企画でもある三宅航太郎《向島おしよくじプロジェクト》を挙げることができよう。《向島おしよくじプロジェクト》とは、墨田区東向島地域の飲食店の箸を「おみくじ」のくじ棒のように筒の中に入れて、「食事」の「おみくじ」=「おしよくじ」を作るシステムアートである。箸には一本一本番号がふってあり、くじを引いた人は箸に書かれた番号と同じ番号の札紙をもらうことができる。このプロジェクトは、その後《京島おしよくじ》《谷根千おしよくじ》《中川版おしよくじ》など、さまざまな地域に野火のように広がっていった。

アート活動においてこのような事例は枚挙に暇がなく、むしろ、「アートプロジェクトを評価するために～評価のくなぜ?>を徹底解明～」の中で、芹沢が

「プロジェクト・ポテンシャル」という言葉で示したような予測不可能な展開の可能性こそ、アート活動の本質的な価値であるとも言える。

ネットワーク化と越境を支えるシステム

そうであるとすれば、アート活動のベターメントのためには、野火的な活動の展開や拡大を可能にし、促進していくためのシステムが必要だということになる。野火的な活動を支援するためのシステム。それを実現するためには、従来の人材育成プログラムが視野に置いてきたような垂直方向の学習——知識の獲得、スキルの熟達化——を見るだけでは不十分であり、それよりもむしろ、水平方向の学習——社会的ネットワークの創出・ジャンルやカテゴリーの越境——を視野に置くことが必要となる。

TARLの試みは、そのような意味で、アートプロジェクトの展開・拡大の根本にある、社会的ネットワークの構築や越境を支援するための試みであるといえる。今回紹介している各ゼミの成果物——ガイドラインや各種リスト、ドキュメント等——は、アートプロジェクトの現場における様々なローカルリティを、ゼミという場において交錯させ、その中からインターローカルな知を抽出することによって作り出されたものである。これら成果物はインターローカルな性質を持つことによって、また異なる現場のローカルリティの中で再文脈化されていく。ローカルからインターローカルへ、またインターローカルからローカルへと向かう、この流れの中で、複数のローカルリティがつながれ、それぞれの場における知が共有されていく。つまり成果物は、抽象化・脱文脈化した知を創出することによって、複数の現場のネットワーク化や越境を図るものであるといえる。これら成果物については、本リーフレットの表面で紹介しているため、ここでそれらを詳しく説明することはせず、ここではむしろ、それら成果物が生み出された連続ゼミという場におけるネットワーク化と越境について考えてみたい。

「受け手」のコミュニティ／「創り手」のコミュニティ

——【『見巧者』になるために】批評家・レビュー養成講座

「人材育成プログラム」という言葉を耳にした人が、最初に思い浮かべるのは、「新参者」から「熟達者」への発達的変容であろう。TARLの連続ゼミの中でも、もっともこの考え方に近い実践を行っていたのは、小崎哲哉ゼミ「『見巧者』になるために」（以下、小崎ゼミ）である。『REAL TOKYO』の発行人兼編集長である小崎が、ある時はレクチャーラーとして、またある時は、またある時はプロのレビュー

ワーとして、そしてまたある時は編集者としてゼミ生の前に現れる。これによって、「ゼミ」という一見座学的な場所が、ある時は編集会議の場、ある時はアーティストへのインタビューの場へと変化していった。このようにして「座学」/「実践」という二つのカテゴリーを隔てていた壁がゼミでの小崎の実践の中で少しずつ融解し、その中で、「受け手」のコミュニティとして存在していたゼミ生のコミュニティが、いつの間にか「創り手」のコミュニティへと変容していく様子を、このゼミでは見ることができた。

小崎ゼミにおいてある一定の時期から参加するゼミ生が減少した、という事実は皮肉にも、このようなコミュニティの変容をもっとも象徴的に示しているように思う。展覧会やイベントに足を運び、気に入ったものについて文章化するだけであれば、単なる「受け手」でもできるのかもしれない。しかし、作品の意義を社会に発信することを念頭に置きつつ、作品を価値化するための武器となる言語と感覚をもって、作品と対峙していくことには、一定のプロフェッショナルリズムとそれを支える知やスキルが必要となる。

「受け手」のコミュニティから「創り手」のコミュニティへの越境。そこで生じるアイデンティティの変容。「『見巧者』になること」とは、単なる知やスキルの獲得の問題ではなく、「受け手」から「創り手」への越境という問題を孕んでいる。

小崎ゼミにおいて課される課題や、小崎自身やリサーチ・アシスタント(以下、RA)の振る舞いが、常に、ゼミ生を「創り手」として位置づけようとしていたこと——そこに生じる軋轢とゼミ生の葛藤が、参加者数の減少という事態を生んだという事実は、我々に、「受け手」から「創り手」への越境がいかに困難であるかを物語る。小崎ゼミの成果は、そのような越境の困難を指示したことにあるといえるだろう。

異なるコミュニティの接触領域

——「プロジェクト運営ぐるっと360度」「アート活動としてのアーカイブ」

一方で、プロフェッショナルへの熟達化を支援する人材育成プログラムとして機能しつつ、もう一方で、異なった方向性を持つ複数のコミュニティの接触領域を創り出していたゼミもある。「プロジェクト運営ぐるっと360度」と「アート活動としてのアーカイブ」だ。これらのゼミはそれぞれ、「『つくる』人材を育成するプログラム」「『記録する』人材を育成するプログラム」として位置づけられていた。もちろん、その意味でこれらのゼミが果たした意義も大きいですが、アートプロジェクトの拡大・展開を支えるシステムという視点から見ると、これらのゼミは、何よりも、これまでまったく異なる言語や価値観を持ちつづけていた複数のコ

コミュニティの出会いを作り出したことにより大きな社会的意義があるように思う。

例えば、「プロジェクト運営ぐるっと360度」(以下、帆足ゼミ)の一環として実施された、「『アートプロジェクト運営ガイドライン』(以下、『ガイドライン』)をめぐる座談会」。この座談会では、それぞれ異なる時代・地域でアートプロジェクトと関わってきた3名のゲストを招聘し、アートプロジェクトにおいて意味のあるガイドラインとはどのようなものかについて率直な議論が行われた。さらに、この座談会の前には日本各地のアートプロジェクトの担当者に宛て、『アートプロジェクト運営ガイドライン β版』(以下、β版)が送付され、それについてのアンケートが実施された。β版を作成した帆足の予想に反し、『ガイドライン』の項目として必要だという声をもっとも多かったのは「広報」と「評価」。アートプロジェクト草創期から10年たった今、各地の担当者が、「いかに『外』とつながるか」という点において、何らかの指針を必要としている様子を見てとることができた。各地の担当者へのアンケートと、ゲストによるディスカッション。座談会は、これら複数の手段によって集められた「声」が交錯する場となった。

これまででも、アートプロジェクトに関する人々が集まる機会は複数存在していたし、おそらくそのような場でも、複数の「声」は発せられていたのかもしれない。しかし、座談会では、『ガイドライン』が具体的に示されていたために、「声」同士の差異が明確に示されていたように思う。考えてみれば、アートプロジェクトの世界は、なんと、反論のしにくい曖昧な「お題目」に溢れていることだろう。座談会の中で、宮本初音は「もう『可能性』とか、そういうの書きたくない!(笑)」と揶揄をこめて発言していたが、それら「お題目」的な言葉は、誰もそれに対して異を唱えることができないという意味で、モノローグ的に機能してしまう。そこから対話は生じえない。そのようなモノローグ的な言葉から距離を置いて、具体的に徹することによって対話を生み出していくこと。それが座談会の意味であったとするのであれば、そこから生み出される『ガイドライン』は、様々な場で、ふたたび対話を発生させ、複数の「声」を共存させるツールとして機能するだろう。この時、帆足がゼミのなかで、アート以外の様々なコミュニティ——広報やデザインなど——のプロフェッショナルをゲストとして招聘し、異なる「声」を『ガイドライン』に反映させてきたという事実はより本質的に機能し始めるに違いない。

帆足ゼミ同様、ガイドラインの制作に向けてレクチャーおよび研究会等のプログラムを実施してきた「アート活動としてのアーカイブ」では、そこに参加するゼミ生自身が、まったく異なるコミュニティに所属していた。いわゆる「アーカイブ学」を専門とし、アカデミックな関心からアーカイブに関ろうとするゼミ生がいる一方で、アートプロジェクトの現場に関りつづけてきた経験から、ドキュメンテーションやアーカイブ化の必要性を感じてきたゼミ生がいる。そのような中で

当初は困惑を隠せない状況にあったゼミ生も、レクチャーや研究会を重ねていくにつれて、互いに共有することのできる言語を見出していった。

コミュニティ間の境界が可視化されること。その上でその境界を融解させていくこと。複数のコミュニティ間の接触領域においては、常にその二つのモメントが作用する。そして、これまで出会うことのなかった複数のコミュニティの接触による知の創出は、このような二つのモメントの作用によって生じる衝突や対話の中で生じていく。

第三の空間（The third space）

—「アートプロジェクトの0123」「アートのお金と法律入門」

ゼミ生をそれぞれプロフェッショナルとして位置づけてプログラムを展開してきた、これらのゼミに対し、これから何かを始めようとする初心者を対象としたゼミ——小川希ゼミ「アートプロジェクトの0123」（以下、小川ゼミ）・「アート活動のためのキャリア支援プログラム」では、また異なる様相が見られた。

初心者を対象としたこれらのゼミでは、既存の知識があることを前提とし、それをゼミ生と共有することが必要となる。既存の知識を《教える一学ぶ》という、このような関係性は通常、教える側によるモノログな場へと陥りやすい。特に、「アート活動のためのキャリア支援プログラム」が扱うような、法律や税務の知識は、その知識そのものがモノログ的な性質を持つと考えられているため、なおさらである。

しかしながら、ゼミの場では、むしろ《教える一学ぶ》という関係が、イコール、モノログ的な関係ではないことが、実践的に示された。小川ゼミでは、さまざまな知識が、小川自身の「ボク的には…」という視点から語られる。誰のものかわからない匿名の知識ではなく、「ボク的には、これ知っておいたほうがいいんじゃないかと思うんすよね」というかたちで語られる、カッコ付きの「チシキ」。その「チシキ」には常に、小川の「声」のイントネーションや語り口や…その他さまざまなものが付随しており、ゼミの場では、そのような小川個人の「声」によって作りだされる空間とゼミ生の「声」によって作りだされる空間とが混ざり合い、どちらのものともいえない第三の空間が作りだされていたように思う。

「アートのお金と法律入門」においては、弁護士など同じ資格を持つ専門家が複数参加するという、贅沢な場の設計によって、このような第三の空間が創りだされていた。小川ゼミの場合と異なり、法律や税務の知識は、個人の声によって語り得ない／聴き得ない部分が大きい。しかし、同じ問題について同じ資格を持つ専門家たちが異なる意見をもち、議論を交わしている姿を見ることによって、

その場に参加するゼミ生は否応なく、一見、非人称的な論理が、実はその深い根の部分で、その語り手個人の「声」とつながっていることを見出し、自らの「声」をその場に参加させるきっかけを見出す。集中合宿という形式は、法律や税務の専門家とゼミ生との社会的ネットワークの形成に寄与するだけでなく、このような意味で、専門家しか使いこなすことのできないものと思われがちな法律や税務の知識や権威を脱構築し、ゼミ生が自分自身のものとしてそれらの知識を使いこなすきっかけを作り出していたと言えよう。

まとめ：学習しつづける社会システムへ

—「アートプロジェクトを評価するために～評価のくなぜ?」を徹底解明—

まとめに代えて、最後に、若林朋子ゼミ「アートプロジェクトを評価するために～評価のくなぜ?」を徹底解明～」（以下、評価ゼミ）を事例として、今後のTokyo Art Research Labの展開について期待するところを述べたい。

これまで述べてきたように、TARLでは、様々なコミュニティ間の越境やネットワークの構築を試み、実現してきたが、それを継続的なものとし、野火的に拡張・展開をつづけるアート活動を支える社会システムを作りだしていくためには、TARLに関わったあらゆる立場の人々——コーディネーター、RA、インターン、ゼミ生——が、現在のTARLのシステムをさらにより良いものへと更新しつづけることが課題となる。アート活動が常に変化し、新たな可能性を生み出しつづけるものである以上、そこに関わるあらゆるシステムも更新しつづけていかなければならない。

評価ゼミでは、そのような、自ら学習し更新を続けるシステムのモデルを見ることができたように思う。評価ゼミは、コーディネーターの若林によって企画運営される「レクチャー」と、RAの佐藤李青によって企画運営される「研究会」の2つの柱によって成り立っていた。「レクチャー」は、アートプロジェクトの評価をめぐるこれまでの議論を一望する機会となり、「研究会」は今、まさにアートプロジェクトの評価に何らかのかたちで関わらざるを得ない人々が集まり、様々な評価のケース・スタディをもとに、自分自身が抱える課題も含めて検討しながら、「アートプロジェクトにおける評価とはどうあるべきか?」という問題を議論した。ゼミ生——特に、研究会にも参加しているゼミ生——は、レクチャーの内容からこれまでに蓄積されてきた評価に関する知識を得、それをひとつの痕跡として利用しながら、研究会で新たな知を生みだすための議論に携わる。また研究会での議論を経て、レクチャーに参加することで、そこで語られる内容はまた新たな見え方をしてくることになる。このような往還を経て、既存の知識と新たな知と

が混じり合い、交錯し、アートプロジェクトの評価についての知のありようを更新していく場が作りあげられる。

評価ゼミにおいてももっとも意義深い成果のひとつは、新たな知を作りだしていくためのコミュニティが、「研究会」というかたちで、生み出されたことにあるだろう。

「研究会」のメンバーのうち有志は、佐藤が事務局長を務める「小金井アートフルアクション！」の評価について継続的に考える「評価ミーティング」に同席をすることとなった。平成23年2月に行われた第1回評価ミーティングでは、まずはじめに佐藤より、研究会での議論を踏まえたプレゼンテーションが行われ、それを踏まえて、「小金井アートフルアクション！」の評価をどのように考えていくべきかの議論が行われていった。

このように、TARLから生み出されたシステムが、継続的に学習を続けていくための自律的なシステムとなり、そのシステムがアート活動の展開を支えていくという構図は、ひとつの理想的なモデルである。今年度 TARLとして実施されたさまざまな試みが、このようなかたちで、あるいは、また異なるかたちで、アート活動を支えるための社会システムとなることを願いたい。

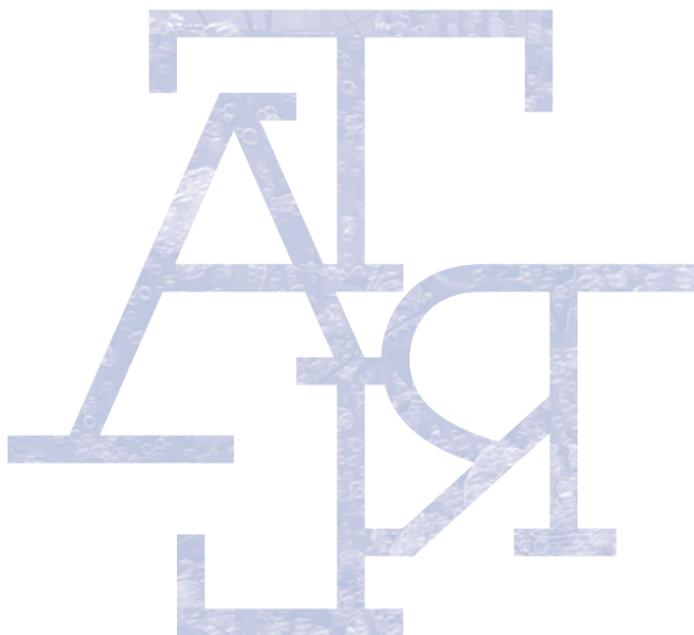
(東京アートポイント計画 プログラムオフィサー 石田喜美)



石田喜美 (いしだ・きみ)

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
地域文化交流推進担当 (東京アートポイント計画 プログラムオフィサー)

1980年東京都生まれ。筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科修了。教育学博士(筑波大学)。日本学術振興会特別研究員を経て、2009年4月より現職。社会文化的学習理論の視点から、まちなかアートプロジェクトを担う人材や組織の育成に携わる。代表する論文に「交流ノートにおける「読者」から「作者」への移行—水戸芸術館現代美術センター教育普及プログラム・高校生ウィーク2006「ちへい / cafe」における小学生の参加過程の分析—」(日本読書学会「読書科学」, 50-3・4, 2007)など。



TRA TOKYO ART
RESEARCH LAB

<http://www.bh-project.jp>